

＜必見!＞ 6歳未満の子育て中のママ

あなたは幼児教育で こんな間違いをしていますか？

ノーベル経済学賞受賞のヘックマン教授によって、気が付かないうちに彼らがあなたに刷り込んだ「英語・水泳・ピアノ・体操」などの習い事中心の「間違った幼児教育」から、あなたとお子さんを「正しい幼児教育」へ導くことができるようになりました。

4歳…5歳…6歳までに、正しい教育を受けるか？ 受けないか？ で、あなたのお子さんの将来は…



目 次

- 02 なぜ、多くのパパ・ママが間違いをするのか？
- 03 幼児教育の不都合な真実
- 08 脳医学者・東北大学「瀧 靖之」教授インタビュー
- 13 なぜ、子どもの学力は 6 歳までに 90%決まってしまうのか？
- 15 警告!! これを知る前に習い事を始めてしまうと...
- 19 【付録】英語教育を始める最高のタイミングは？



なぜ、多くのパパ・ママが**間違い**をするのか？

多くのパパ・ママはお子さんに「少しでも賢い子に育ててもらいたい」「才能を伸ばす環境を用意したい」と思っているでしょう。そして、多くのパパ・ママが「グローバルの時代だから、英語が話せたほうが良い。0歳から英語を始めよう!」と間違ったことを考えています。さらに、「健康にも良いし、将来泳げないと恥ずかしいから水泳教室に行かせよう」「ピアノが弾ければ音感が良くなりそうだからピアノ教室に通わせよう」「勉強だけでなく運動もできたほうが良いから体操教室に通わせよう」と間違ったことを考えている人もいます。



たいていのパパ・ママは、お子さんの「賢い子に育てたい」と思いつつ、**こんな間違い**をしている…

たいていのパパ・ママは、お子さんに「少しでも賢い子に育ててもらいたい」「才能を伸ばす環境を用意したい」と思いつつ、**自分の理想に近づけようとして、このような間違いをする**でしょう。中には、自分が今できなくて不便を感じていることを、お子さんに身につけさせようと考えているパパとママもいます。だから、お子さんにさせたい習い事ランキングは「英語・水泳・ピアノ・体操」が上位を占めるのでしょうか。ただこれは、パパ・ママから見たお子さんにとって役立ちそうなもので、将来本当に役立つか結果が曖昧なものばかりです。

多くのパパ・ママが6歳までの幼児教育に関しての正しい知識が不十分であり、その不十分な幼児教育の知識の結果が大きくその後の人生に影響を及ぼしてしまう、その理由は何でしょうか。「英語は早いにこしたことはない」と考え、「水泳・ピアノ・体操」をやっておけば、英語が話せて、運動ができて、音感が良くて、勉強ができれば将来安泰だと**間違った常識**を持っているのは、なぜでしょうか？これらの問に対する答えは明らかです。

ノーベル経済学者ヘックマンの40年以上にわたる追跡調査の結果、この理由を明らかにしました。ほとんどのパパ・ママがお子さんの幼児教育に関して間違ってしまうのは、あなたのせいではありません。悪いのは、あなたに間違った常識を刷り込んだ彼らです。

幼児教育の**不都合**な真実

どのような常識も情報を繰り返し受けるうちに刷り込まれることによって形成されます。インターネットの教育・育児サイトから情報配信する彼らは、ご存じの通り「専門家とは限りません」。彼らの中には、専門家ではないにも関わらず、あたかも専門家いるように見せて、それらしき情報を配信している人もいます。中には、科学的根拠なしに、間違った持論を配信している人もいます。インターネットならまだしも、テレビで教育評論家として、科学的根拠なしに、間違った持論を話し、世の中に間違った持論を広めてしまっている人もいます。つまり、私たちは科学的根拠がない幼児教育に関する情報を、知らないうちに刷り込まれてしまっているのです…。



私たちは科学的根拠がない幼児教育に関する情報を、知らないうちに刷り込まれてしまっている…

しかも、「6歳までに90%の能力が決まってしまう」と言われるほど、脳の発達が早いお子さんの教育は、遅ければ遅いほど効果が薄くなり、一度間違えたら後戻りできない人生で1回限りの最も重要なことです！しかし、多くのパパ・ママは、専門家とは限らないうえ、正しいか間違っているか分からない情報や、科学的根拠なしの間違った彼らの持論のせいで、正しい幼児教育の情報を受け取れていません。

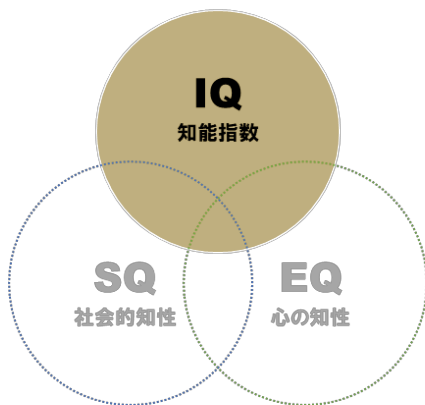
だから、私たちは彼らの悪影響で、お子さんの教育といえば「英語は早いにこしたことはない」

「水泳・ピアノ・体操ができればよい」などと、なんとなく将来役立ちそうなスキルばかりを習得させようとしします。このために、こんな恥ずかしい間違いがずっと続いているのです。

この点が、ノーベル経済賞を受賞した経済学者「ヘックマン教授」が脳科学との融合でたどり着いた、これまで語られることのなかった「幼児教育の不都合な真実」です！ここで説明のために彼の「ペリー就学前プロジェクト」調査をご紹介します。ヘックマンは、就学前の幼児に対して、以下の2つのクラスに分けて40歳まで追跡調査しました。

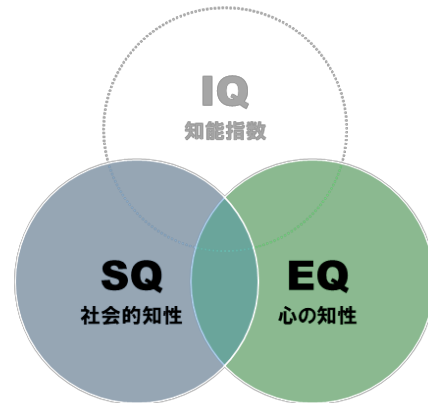
ノーベル経済学賞を受賞したヘックマン教授による
【ペリー就学前プロジェクト】

<「認知能力(IQ)」重視クラス>



日本の学校教育方針と同じように
「認知能力(IQ)」を重点的に教育を行った

<「非認知能力(EQ/SQ)」重視クラス>



日本の学校教育方針とは違い
「非認知能力(EQ/SQ)」を重点的に教育を行った

VS

＜各クラスが学ぶ主な能力の違い＞

認知能力(IQ)重視クラス	非認知能力(EQ/SQ)重視クラス
いわゆる一般的な学力	やり抜く力
-	やる気・意欲
-	忍耐力・粘り強さ
-	理解度の把握・自分の状況の把握
-	リーダーシップ・社会性
-	立ち直る力・上手に対応する
-	創造する力・工夫する力
-	好奇心・外向性・協調性

※上表のように、日本の学校教育方針は「認知能力（IQ）の向上」を重視し、非認知能力（EQ/SQ）を学ぶ機会がないに等しい。つまり、今の学校では非認知能力（EQ/SQ）を習得することが難しいとも言える。

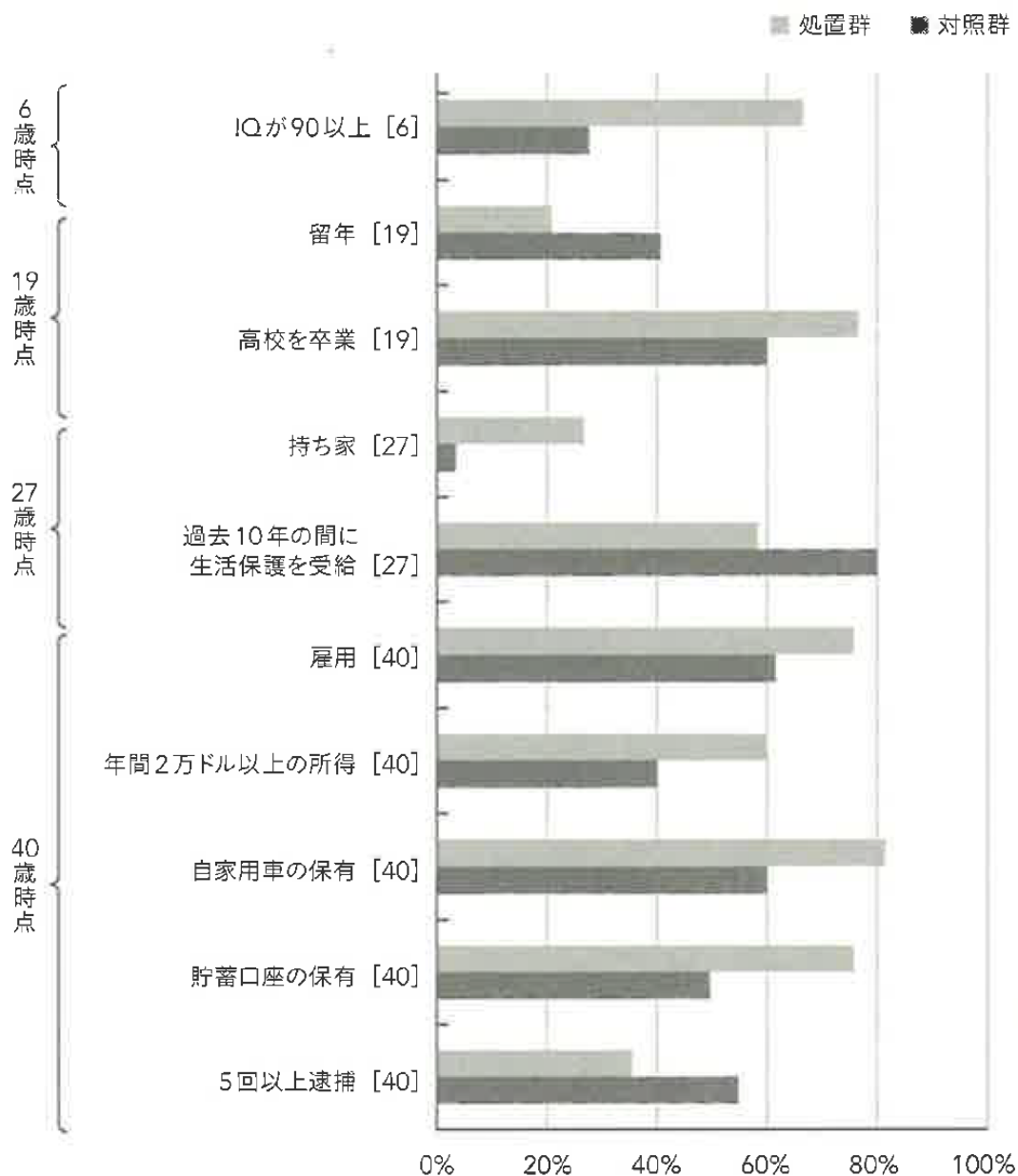
「ペリー就学前プロジェクト」とは：

「ペリー就学前プロジェクト」とは、ノーベル経済学賞を受賞したシカゴ大のヘックマン教授らによる「40年以上も追跡調査」されている教育プロジェクト。1960年代から開始され、現在も調査対象者を追跡調査中。このプロジェクトは、低所得のアフリカ系アメリカ人の3～4歳の子どもたちに「質の高い就学前教育」を提供することを目的に行われた。就学前の幼児に対して、午前中に毎日2時間半ずつ教室での授業を行った。さらに、週に1度、教師が各家庭を訪問して90分間の指導を行った。指導内容は子どもの年齢と能力に応じて調整し『非認知能力を育てることに重点』を置き、「子どもの自発性を大切にする」活動を中心にした。

また、教師は子どもが「自分で考えた遊び」を実践し、毎日復習するように促した。復習は集団で行い「社会的なスキル」を教えた。この就学前教育は30週間続けられた。そして、この就学前教育の終了後、これを受けた子どもと受けなかった対照グループの子どもを40歳まで追跡調査し、現在も追跡が続いている。

一方のクラスは、日本の学校教育方針と同じように「認知能力（IQ）」を重点的に教育していきましました。もう一方のクラスは、「認知能力（IQ）」ではなく、日本の学校教育方針とは違い、『やり抜く力』『やる気・意欲』『忍耐力・粘り強さ』『創造する力』『好奇心』『協調性』などの「非認知能力（EQ/SQ）」に重点的に教育しました。すると、この2つのクラスに、このような大きな違いが出るようになりました。

図16 ペリー幼稚園プログラムの効果



注：1. 灰色の棒グラフは処置群の子どもたちの成果の平均値を表しており、黒色の棒グラフは対照群の子どもたちの成果の平均値を表している。
 2. 「」内の数字は、調査時点の子どもの年齢を表す。

出所：Schweinhart, L.J., Xiang, Z., Barnett, W.S., Belfield, C. R., & Nores, M. (2005) Lifetime effects: the High/Scope Perry Preschool study through age 40. Ypsilanti: High/Scope Press

このように、日本の学校教育方針と同じ「認知能力 (IQ)」重視クラスと、『やり抜く力』『やる気・意欲』『忍耐力・粘り強さ』『創造する力』『好奇心』『協調性』などの「非認知能力 (EQ/SQ)」重視クラスでは、明らかな違いが出ています。

あなたのお子さんの将来に影響しそうな主な違いを見ると、「非認知能力 (EQ/SQ)」を重点的に教育したクラスのほうが、「認知能力 (IQ)」重視のクラスよりも、

「非認知能力 (EQ/SQ)」を重点的に教育したクラスのほうが…

- 6 歳時点での「IQ」が約 40% 高い
- 19 歳時点での「高校卒業率」が約 20% 高い
- 27 歳時点での「持ち家率」が約 30% 高い
- 40 歳時点での「所得」が約 20% 高い
- 40 歳時点での「逮捕率」が約 30% 低い

「非認知能力を重視したクラス」は、認知能力を重視した対照クラスよりも、

小学校入学の時点の IQ が高かっただけでなく、その後の人生において、

学歴が高く、雇用や経済的な環境が安定している

このように、明らかな違いが出ています。「非認知能力を重視したクラス」は、認知能力を重視した対照クラスよりも、小学校入学の時点の IQ が高かっただけでなく、その後の人生において、学歴が高く、雇用や経済的な環境が安定していて、反社会的な行為に及ぶ確率も低いということです。

これらの結果は決して根拠のない数字ではありません。科学的手法によって比較されました。この結果も驚くべきなのですが、もっとも興味深いのは「子どもが成人後に成功するかは『幼少期の介入の質』に大きく影響される」ということが分かったことです。

つまり、幼少期に「認知能力 (IQ)」や社会性や情動の「非認知能力 (EQ・SQ)」の各方面の能力を幅広く身につけることで、その後の学習をより効率的にし、それによって学習することがよりカンタンになり、継続しやすくなります。

そして、その結果…今の日本の学校教育方針である「認知能力 (IQ) 重視型」の教育よりも、あなたのお子さんに良い将来がもたらされるでしょう・

だから、10 万部のベストセラー『16 万人の脳画像を見てきた脳医学者が教える「賢い子」に育てる究極のコツ』の著者東北大学の瀧靖之教授も、認知能力 (IQ) だけでなく、この「非認知能力」の重要性について、『0 歳から 6 歳までの子供を持つママのための教育情報サイト「マママナ」』のインタビューでこう述べています。

脳医学者「瀧 靖之」教授インタビュー

学校では教えない**非認知能力**



「非認知能力」は重要です。もちろん認知能力（IQ）向上のトレーニングは学校でやります。「非認知能力」は、なかなか学校では教えてくれない能力です。非認知能力とは、「やり抜く力、我慢する力、共感する力」などのことを言います。これらは非常に重要です。

特に「共感性」は重要でしょう。やはり、私たちは、仕事でも、スポーツでも、何をやるにしても人と関わることは絶対に避けられません。むしろ、それこそが人たる所以なのでしょう。では、そのときに何が重要かと言えば、それが「共感性」です。

共感性とは、相手が何か困っている、苦しんでいるなど、何かあったときに、自分が相手の立場に立って、相手の気持ちを理解して、そして適切な行動である言葉がけをすることを指します。

このようなことは非常に大切です。私たちは一人で生きていくものではありません。必ずコミュニケーションを取って、助け合いながら生きていきます。だから、この共感性こそが、人生を楽しく豊かにするうえで重要だと考えます。しかし、この共感性は、学校で教えてもらえるのではありません。これが非常に難しいところだと思います。それに関わらず、共感性は私たち人間にとって大切です。

<瀧 靖之（たき やすゆき）プロフィール>

東北大学加齢医学研究所教授。医師。医学博士。1970年生まれ。1児の父。東北大学東北メディカル・メガバンク機構教授。脳のMRI画像を用いたデータベースを作成し、脳の発達、加齢のメカニズムを明らかにする研究者として活躍。『16万人の脳画像をみてきた脳医学者が教える「賢い子」に育てる究極のコツ』（文響社）は、10万部を突破するベストセラー。最新の脳研究をふまえた「科学的な子育て法」を提案。



また、日本における教育経済学の第一人者でもあり、30万部のベストセラー『「学力」の経済学』の著者中室准教授も影響を受けている大阪大学の大竹文雄教授も、この「非認知能力」の重要性について、解説を担当した『幼児教育の経済学』の中でこう述べています。

大阪大学・大竹文雄教授

就学前教育と非認知能力の重要性

ヘックマン教授の就学前教育の研究は、2つの重要なポイントがある。第一に、就学前教育がその後の人生に大きな影響を与えることを明らかにしたことである。第二に、**就学前教育で重要なのは、IQに代表される認知能力だけでなく、忍耐力、協調性、計画力といった非認知能力も重要だ**ということである。

幼児教育と聞くと、私たちは算数や国語の早期教育をイメージしてしまう傾向がある。しかし、本書で明らかにされているのは、**社会的に成功するためには、非認知能力が十分に形成されていることが重要であり、それが就学前教育で重要な点だ**ということである。



別の研究でもこのことは確認されている。Monffit et al. (2011)の研究では、自制力が高かった子供と低かった子供では、大人になってからの健康度や経済力がどの程度異なるかを30年間の追跡調査で明らかにしている。**自制力が高かった子供は大人になったも健康度が高い**という。子供の頃の自制力は経済的にも相関がある。**自制力が高かった子供を見ると、30年後の社会的地位、所得、財務計画性が高い。**

ジェームズ・J・ヘックマン [著] 大竹文雄 [解説] 『幼児教育の経済学』（東洋経済新報社、2015年）pp109-112より引用

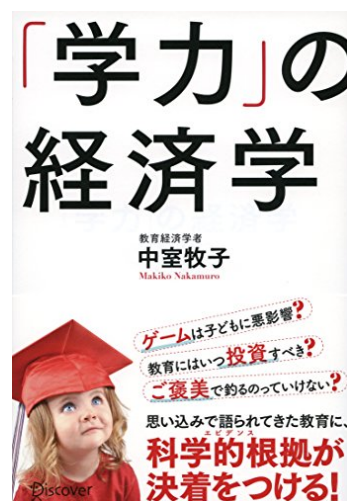
そして、30万部のベストセラー『「学力」の経済学』の著者慶應義塾大学の中室准教授も、この「非認知能力」の重要性について、著書でこう述べています。

慶應義塾大学・中室准教授

非認知能力を過小評価してはいけない

私がこの章で最も強調したいのは、非認知能力の重要性です。

子を持つご両親の多くは、お子さんの学力テストの結果に一喜一憂しがちです。点数や偏差値ではっきりと数字で表すことができ、その変化も良くわかる学力は当然気になるものでしょう。一方、非認知能力は数値化が難しいだけでなく、どれほど子どもの将来の成功にとって重要なものなのか、今まで十分に示されてきませんでした。この結果、きちんとしつけをすることよりも、テストで100点をとらせることのほうが大事だという価値観が、私たちの社会に根付いてしまっているようにも感じます。



もちろん、学力は重要ではないというつもりは毛頭ありません。しかし、これまでの心理学の貢献によって非認知能力は数値化され、そして経済学の貢献によって、非認知能力への投資は、子どもの成功にとって非常に重要であることが多くの研究で示されています。

中室牧子『「学力」の経済学』（ディスカヴァー・トゥエンティワン、2015年）97Pより引用

つまり、6歳までの幼児期に身につけるべきなのは「英語・水泳・ピアノ・体操」などの「スキル」ではなく、「認知能力（IQ）」と「非認知能力（EQ・SQ）」だということです。だから、「認知能力（IQ）」や社会性や情動の「非認知能力（EQ・SQ）」をバランス良く身につけてから、「英語・水泳・ピアノ・体操」を習ったほうが、お子さんにとってより効果的だということです。

このように、あなたは彼らの刷り込みによって、お子さんの能力を最大に伸ばすのに間違った知識を入れられてしまっています。彼らが専門家でなければ…科学的根拠もなく…ましてや持論を持ち出し、あなたに間違った知識を刷り込もうとしているのが見えてきます。

もし、あなたがそのまま間違った知識を刷り込んだままお子さんを教育していたら…お子さんの5年後…10年後…15年後は一体どのような姿になっているのでしょうか…？

だから、この間違った知識を塗り替え「幼児教育に関する正しい知識」を入れ、その正しい知識をもとに教育しているパパ・ママからは、このような声をいただいています。

何も知らず考えずに育てていたらと想像すると恐ろしい…

何も知らずに、何も考えずに、何もせずに子どもを育てていただろうから、そう思うと恐ろしい。（と、子どもが小学生になってから特に最近よく思う）

また、親以外に褒める人がいる…という環境は日常では少ないので、この正しい教育の知識が大変大切な存在です。現在小学3年生ですが、3～6歳頃に覚えた「暗記の達人」「論語集」「円周率200ケタ」などを、長期間空いても、すぐに思い出して少し練習したら、またすぐにサツと言えるようになるので、すごいなぁと感じます。

（小学3年生のママ）

通っていなかったら他の子と比較して育てていたかも…

この正しい知識を知らなかったら、他の子と比較して、子どもを育ててしまっていたかもしれせん。

色々なことに興味を持ったり、プリントをするのが習慣になったり、分からないことがあると、本で調べることをしたり…正しい知識をもとにした教育を受けているからこそ、特に本人にとって良い刺激になっているようです。

特に一生懸命やっているわけではなく、本人がやりたがるのでやらせている部分があるので、他の子より出来ることが多く、親の私も比較しないのだと思います。その子その子に必ず良いところがあり、それを伸ばしてあげたい、そう思いながら、これからもこの正しい知識をもとに子育てをしたいと思っています。

（6歳のママ）

このように、彼らによってこの間違った知識を入れられてしまったが、その誤った知識を塗り替え「幼児教育に関する正しい知識」を入れ、その正しい知識をもとに教育しているパパ・ママは、お子さんの将来に不安よりも期待が大きくなっています。

だから、「この教育法を知らずに子育てをしてしまったから…」と、お子さんが6歳になったとき青ざめる必要ありません。

そして、この「幼児教育に関する正しい知識」を入れて教育や子育てをし、中学生や高校生、大学生に成長したお子さんを持つパパ・ママからは、このような声をいただいています。

中学・高校で憶力やイメージ力に活かされています

上の子は現在理数科に通っています。そこで、0～6 歳まで一緒に通室していた M ちゃんと同じクラスになりました。M ちゃんのお母さんとお互いの子どもの**記憶が良いのは教室のおかげ**ネと話しています。小学生のころ、**宇宙への夢をイメージ通りに書いて、県の作文コンクールで金賞**になりました。現在は、そのかいあって、宇宙航空工学関係の仕事に就きたいと夢を膨らませています。

下の子は小学生からピアノを始めましたが、絶対音感がついています。本人の努力もありますが、**教室で学んだイメージの力を使うので理解も早い**せいか、コンクールで入賞することができました。

(卒業生・高校2年生・中学3年生のママ)

記憶力と集中力に活かされています

学校では、先輩からもかわいがってもらえ、友だちも多く、いつもまわりに人があつまってくるようです。今でも**驚かされるのは集中力！**何をするにも**すごい集中力**です。**記憶力もとても良い**です。勉強だけでなく、スポーツでも音楽でも、色々な場面でその集中力と記憶力は発揮されています。本もよく読みます。早く読めるので、どんどん進み、本人も楽しいようです。部活に勉強に忙しい中、**英検3級、漢検3級**を受け、合格しました。これは、**短い時間で集中して勉強**できることの結果だと思います。

(卒業生・中学2年生のママ)

事務処理能力や読むスピードが速い、人の気持がよく分かる

娘は、イメージ力が強く、大学もパンフレットを見た瞬間に「早稲田大学にいく」と中学生のときに決めていました。現在は、早稲田大学の政治経済学部に通いながら、政治サークルに所属しています。国会議員を招いて勉強会を開いたり、学生インターンとして国会に行ったりと、充実した日々を過ごしているようです。環境フォーラムにも外務省から招待されて参加させていただきました。**教授秘書のアルバイトの中でも「事務処理能力や読むスピードが速い、人の気持がよく分かる」**などと言われているようです。高校時代にはエコノミクス甲子園で準優勝した縁もあり、今は事務局で大会のクイズ問題作成や広報の仕事にも携わっています。

(卒業生・大学生のママ)

この声が示すように、誤った知識を塗り替え「幼児教育に関する正しい知識」を入れて、それをもとに教育や子育てをすると、「**認知能力 (IQ)**」や「**非認知能力 (EQ・SQ)**」をバランス良く身につけながら、お子さんの能力が、まるで周囲からは天才と思われるほどの脳に近づきます。

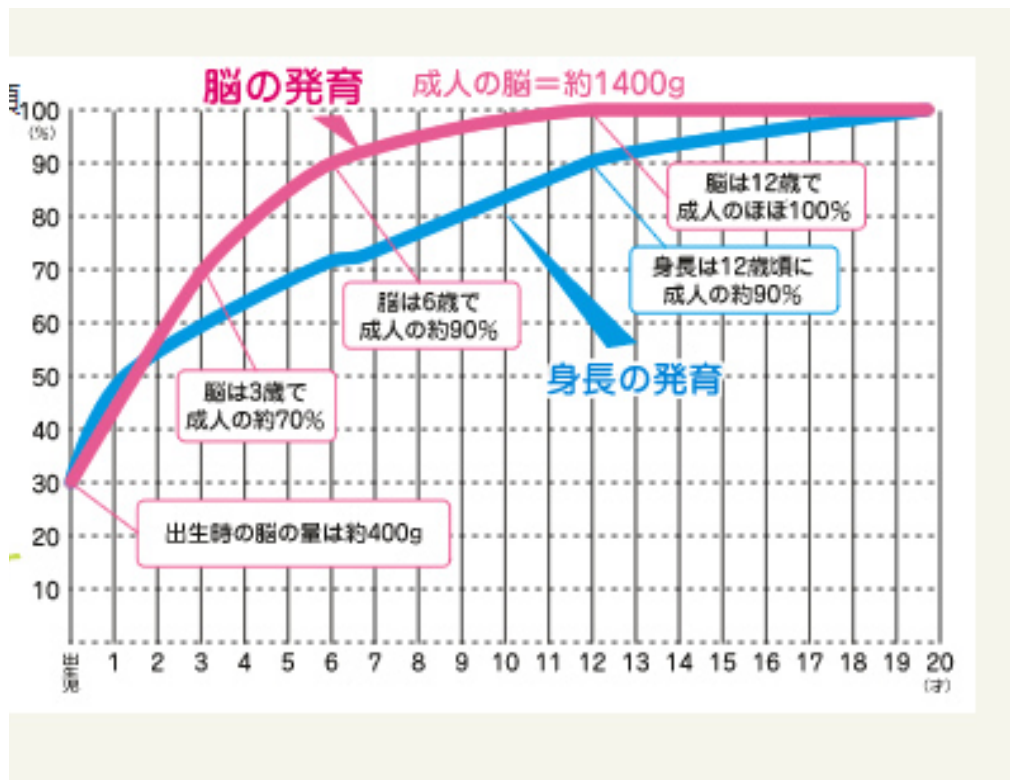
その結果、イメージ力、記憶力、集中力が養われ、中学校、高校、大学でも素晴らしい結果を収めることができるでしょう。でも、ここで注意しなければならないことがあります。それは、年齢のリミットがあることです…

なぜ、子どもの学力は 6歳までに90%決まってしまうのか？

子どもの学力は、6歳までに70%…80%…「90%」決まると言われています。なぜなら…人間の脳の資質は「6歳までに成人の約90%」が完成するからです。つまり、6歳までにお子さんにどのような教育をするかで、お子さんの学力は90%決まってしまう。

だから、もしあなたが「勉強は小学校に入学してからで良いだろう」と、のんびりしていると、あなたのお子さんの学力や能力の向上は手遅れになる可能性が高くなるでしょう。だから、急がなければなりません…

<脳の発育グラフ>



子どもの脳の資質は、3歳で「70%」…6歳で「90%」…12歳で「ほぼ100%」決まってしまう。

つまり、6歳までにどのような教育をするかで将来が大きく変わる…

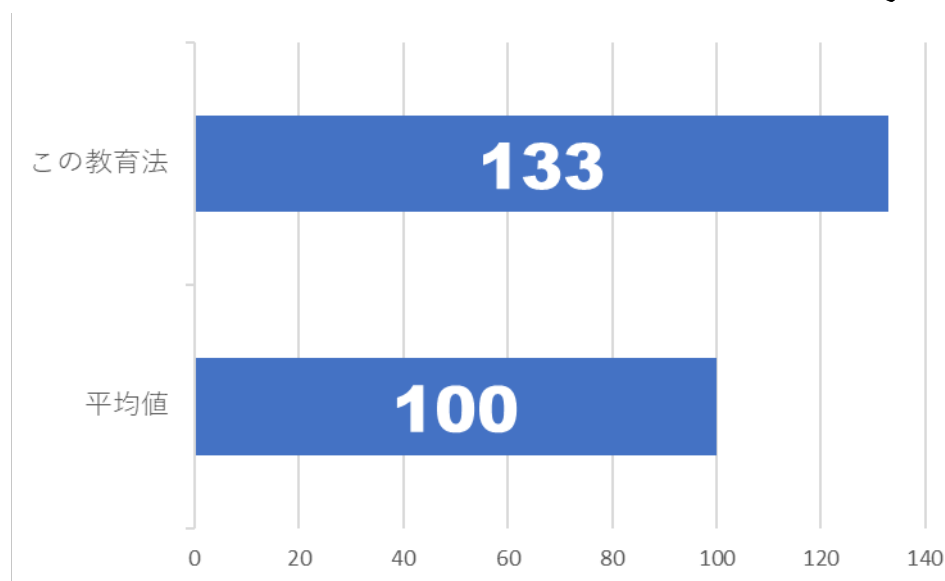
しかも、学力もほぼこの6歳までのタイミングで決まってしまう。しかし、間違った教育を刷り込む彼らは「受験勉強はいつからでも間に合う」と言って、6歳以降でも能力が上がると間違った知識を広めています。ですが、実際は6歳までに何を教育するかで、受験のときには、すでに大きな差が着き、手遅れなのです。

だから、この時期までに、「脳の資質が90%決まってしまう6歳まで」に、「英語・水泳・ピアノ・体操」などの「スキル」ではなく、「認知能力 (IQ)」と「非認知能力 (EQ・SQ)」をバランス良く身につけることが重要です。これは、ノーベル経済学賞受賞のヘックマン教授の「ペリー就学前プロジェクト」の調査結果でも科学的に証明されています。

だから、この「正しい知識をもとにした教育」をすることで、年齢に合わせた効果的な学習をすることができるようになります。しかも、より効果的なのは「脳の資質が90%決まってしまう6歳まで」に適切な学習することです。それよりも後ろになればなるほど、効果は薄れます。つまり、6歳以降に学習塾に通っても、もう勝負は決まってしまうということです。賢明なあなたは、6歳までに何をすべきか、もうお決まりでしょう。

ちなみに、幼児教育を小学校入学前から開始し、1年以上継続したお子さんの平均IQは、平均値よりも「33も高い」という実績があります。

<調査結果：「正しい知識をもとにした教育」を受けた子どもと平均的な子どものIQの違い>



「正しい知識をもとにした教育」を受けた子どもは、平均的な子どもよりも「IQが33高い」。

つまり、この教育を受けた子どもは、平均的な子どもと違い「認知能力 (IQ)」や

「非認知能力 (EQ・SQ)」をバランス良く身につけているだけでなくIQも高い

ここからも、「脳の資質が90%決まってしまう6歳まで」に適切な学習をお子さんに用意することが、どれだけ重要か実感いただけるでしょう。それと同時に、この事実を知らない彼らとは違い、この事実を知り正しい知識を持つあなたは、お子さんを正しい将来へ導くことができるで

しょう。

このように、この教育法を5歳…4歳…3歳までに始めたお子さんは、IQで平均値よりも「33も高い」という実績があります。しかも、、「認知能力 (IQ)」や「非認知能力 (EQ・SQ)」をバランス良く身につけています。さて、あなたのお子さんにとって、この「正しい知識をもとにした教育」を受け始める最高のタイミングは、いつでしょうか…？

警告！！

これを知る前に習い事を始めてしまうと…

お子さんの能力を伸ばすには、このような教育も重要ですが「英語、水泳、ピアノ、体操などの習い事」も重要ですね？…残念！違います。これらの習い事をする前に、もっと重要なことがあります。

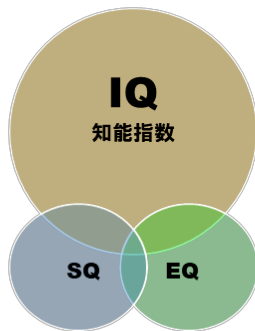
この「正しい知識をもとにした教育」は、知性を意味する「認知能力 (IQ)」だけでなく、社会性や情動の「非認知能力 (EQ/SQ)」も育てるので優れた人間性を育みます。例えば、元大リーグ一選手の松井秀喜氏は「あまり派手にガッツポーズをしませんね」とインタビューで問われ、「派手なガッツポーズは相手の投手に失礼ですから」と答えました。松井氏にとっては、相手チームの選手でされ、一緒に野球をしている仲間という意識があるのかもしれません。

また、最近では大リーグの大谷翔平選手は、二刀流のそのスキルだけでなく「人間性」を高く評価している特集なども頻繁に目にします。他にも、オリンピックを目指す若い選手が、以前のスポーツ選手と違い「コメント力が高い」と評価されるのも、高い人間性の一部と言えるでしょう。

この松井氏などのように、私たちの「正しい知識をもとにした教育」はスキルだけが一流のではなく、優れた人間性も育みます。反対に、6歳までにこの人間性を育むことをしないで、英語、水泳、ピアノ、体操などのスキルの習得を始めてしまうと、「非認知能力 (EQ/SQ)」が養われることなく、「認知能力 (IQ)」だけが大きくなってしまいます。あなたのお子さんには、この図のどちらの脳になってほしいですか…？

【どちらの脳がいい？】

＜バランスの悪い脳＞



「あいつ勉強はできるけど、人としては…」
と言われる

＜バランスの良い脳＞



「あの人は勉強ができて人間性も素晴らしい！」
と言われる

VS

そうすると、「あいつ勉強はできるけど、中身が…」と、よく耳にするようなことが、あなたのお子さんに起こってしまうでしょう。つまり、この幼児教育の方法は、あなたのお子さんを「彼は勉強もできて、人間的にも優れている」と思われる将来につなげるということです。

ちなみに、この「正しい知識をもとにした教育」をお子さんにしているパパ・ママからはこのような声をいただいています。

「ありがとう」の気持ちを伝えるために手紙に書いてくれます

この「正しい知識をもとにした教育」を受けるようになって、母子共に色々な面で助けていただいています。第1子のため、何をどう取り組めば良いか分からずにいました。ですが、年齢に合わせたプリントを家庭学習に取り入れたことで、学習の習慣が身につきました。

また、男の子ですので強く優しい子に育ってほしいと願っていましたが、**お友達には優しく接しています**。他にも、「ありがとう」の気持ちを伝えるために手紙に書いてくれます。(主人はこの手紙を大切にしているようです…)

(6歳のママ)

たくさんの人にやさしく接する姿に驚きます

日々進化する言葉の能力の高さには毎日「すごいなあ！」と思わされますが、それにも増して我が子に感心するのは、あの小ささで他者への思いやりを見せたときです。家族や友だち、お年寄りの方など、たくさんの人にやさしく接する姿を見ていると、こちらも見習わなければならないと思わされます。

(2歳のママ)

相手を思いやる気持ちに感動しています

子どもにこちらからお願いしなくても食事の用意や、お手伝いをしてくれます。寝ていると、毛布を持ってきて掛けてくれることや、頭が痛いと言ったときに「休んでいいよ」と言ってくれます。自分で考えて、相手を思いやる気持ちに感動しています。

(4歳のママ)

このように、「認知能力 (IQ)」だけでなく「非認知能力 (EQ/SQ)」を育んだお子さんは、人を思いやる気持ちなどが養われ優れた人間性を持ち合わせていきます。もし、あなたがお子さんに、「非認知能力 (EQ/SQ)」を養わずに、英語、水泳、ピアノ、体操などの習い事から始めてしまうと、もうこの能力を養うことは手遅れになるでしょう。

しかし、もしあなたが、この教育法の重要性を理解し、「認知能力 (IQ)」だけでなく「非認知能力 (EQ/SQ)」を、お子さんに育むなら、あのような将来が待っているでしょう。賢明なあなたであれば、もうどちらを選択するかはお決まりでしょう。賢明なあなたは、どちらを選択しますか？

もし、この「正しい知識をもとにした教育」を、

あなたのお子さんが6歳になる前に受けることができたなら…

どのような未来が待っているのでしょうか？

ただし、、、

誰でもこの教育を受けられるわけではありません…

もし、あなたが「英語だけでできれば良い」「水泳だけでできれば良い」「ピアノだけが弾ければ良い」「体操だけでできれば良い」とお考えであれば、きっとこの「正しい知識をもとにした教育」を受けないほうが良いでしょう。これは、「認知能力 (IQ)」だけを重視するパパ・ママのものではありません。英語・水泳・ピアノ・体操などのスキルだけを重視するパパ・ママのものではありません。

これは、そのようなものをより活かすのに、「認知能力 (IQ)」だけでなく、社会性や情動の「非認知能力 (EQ/SQ)」や人間性もお子さんに育みたいパパ・ママのものです。そして、、、そのようなパパ・ママに、お子さんが瞳を輝かせて、楽しんで学習している姿を見ていただくものです。

ただし、お子さんの成長は「能力が6歳までに90%決まる」ので、このタイミングを逃してはいけません…

ですが、もちろん、あなたは「間違った幼児教育の知識」ではなく正しい幼児教育の知識を持っているので、このような情報が必要ないことは知っています。でも、それこそがあなたにこの教育をオススメしたい理由です。あなたのお子さんに「こんな将来がまっていたら」どのような気持ちになりますか？

- 4歳くらいではなく「あいうえお」を、2歳になる前に言えるようになっている
- 未就学児なのに、俳句や百人一首などを暗唱して楽しそうに言っている
- 毎日規則正しく早起きしてプリントをやる習慣がついている
- 友だちのすごいところを「すごい！」と素直に褒めている
- 勉強を積極的に楽しんでやっている

でも、間違った幼児教育の知識ではなく…

「正しい幼児教育の知識」を持っているあなたには、

必要ありませんよね？

【付録】英語教育を始める**最高**のタイミングは？



「英語も学ぼうとしています、どちらを先にしたほうが良いですか？」「やはり、これからのことを考えると、英語を優先にしたほうが良いのではないかと考えています。でも、このような幼児教育も必要だと思います。どちらを先にしたほうが良いのでしょうか？」など、多くのパパ・ママから、このような英語教育に関するご質問をいただきます。

結論から申し上げますと、私たちは脳医学の観点から「英語は後から学ぶ」ことをオススメしています。脳医学の観点では、英語は8歳頃からリスニングを中心に開始すると効率良く習得できると考えられています。つまり、反対に言えば、8歳より前に英語を取得しようとしても、効率は良くないと考えられます。

また、この教育の基礎である「認知能力 (IQ)」と「非認知能力 (EQ・SQ)」をバランス良く養えるのは、6歳までと言われています。ペリー就学前プロジェクトにもあったように、この時期を逃すと、40歳以降など、その後の人生に大きく影響していることが分かります。それらを考慮すると、どちらを優先すべきか、お分かりいただけるでしょう。

ちなみに、この教育の基礎である「認知能力 (IQ)」と「非認知能力 (EQ・SQ)」をバランス良く養うことは、パソコンのOSに該当し、それを作ることになります。それに対し、英語はWordやExcelなどのソフトウェアです。パソコンのOSとソフトウェアの関係から見ても、どちらが

良いかお分かりいただけるでしょう。なお、10万部のベストセラー『16万人の脳画像を見てきた脳医学者が教える「賢い子」に育てる究極のコツ』の著者東北大学の瀧靖之教授は、英語教育について、このように述べています。ぜひ、こちらもご参考にしてください。

東北大学・瀧靖之教授



私たちはグローバル社会に世界に生きているので、英語はとても大切なものでしょう。そして、その英語教育の開始時期ですが、**脳医学から見ると「10歳くらい」が良いと考えられています**。その時期は「**臨界期**」と言われ、最も言語を獲得しやすい時期であります。だから、8～10歳の間に英語教育の中でもリスニングを始めると良いでしょう。

一方、そうなると疑問に思うのが「**超早期教育の有効性**」です。これに対する明確な答えは非常に求めにくいものです。ただし、脳医学的に言えることは、決して「**効率は良くない**」ということです。なぜなら、超早期教育の時期は、まだ脳が（言語を習得する）準備ができていないときだからです。その時期に、どんどん言葉を入れてしまうのは、脳医学で見た効率の視点からすると、決して良いものとも言えません。

これは超早期教育を否定するものではありません。ただし、それによって言語全体の能力が上がるかと言えば、そうとは言い切れません。だから、母国語をしっかり入れてから、英語を入れても良いでしょう。

もちろん、2つの言語を同時に覚えることによる良い部分もあります。例えば、一つの物事を、2つの言語から理解することは、記憶の定着につながると言われています。ただし、その反面、深く考えるときに、2つの言語のどちらの言語を使うのが中途半端になると言われています。具体的には、国語の読解のときなどには、苦勞するという報告もあります。

『0歳から6歳までの子供を持つママのための教育情報サイト』より引用